弥陀ヶ原（立山）火山にかける江戸時代の噴火記録*

The ancient manuscript about Midagahara Volcano

地質調査所**
Geological Survey of Japan

弥陀ヶ原（立山）火山に関する噴火記録を検討した結果，天保７年５月26日（西暦1836年７月９日）に，地獄谷（弥陀ヶ原北東部の噴気地帯）において噴火活動（おそらく水蒸気爆発）が発生したことを示す古文書の存在を確認した。

１．はじめに

複数の文献（例えば村山，1979や立山砂防工事事務所，1997）には弥陀ヶ原火山の噴火記録が引用されている。そこで今回，弥陀ヶ原の噴火記事に関する信憑性を検討した。

２．噴火記録

第１表には，弥陀ヶ原火山の噴火記事について，その年代と記述の抜粋及び初出文献をまとめた。

３．文献の解題調査による信憑性の確認

ａ）「佐伯正範氏の實見録」

1858～1890年に記述されたと思われるが明確ではない。佐伯正範氏は立山山麓に居住し，1890年頃には雄山神社の神官を務めていた事が確認された。子孫は転居しており，古文書の所在も確認できない。

慶雲元（704）年の地変については，1000年以上も前の地変に対する伝承の記録で，信憑性は極めて薄い，また天保10年4月29日（1839年６月10日）の地変についても，20～50年前の出来事に対する伝聞の記述である。

ｂ）「伊東御触留」

富山県下新川郡の加賀藩十村役（庄屋）伊東家に伝来する古文書で，役務上書き写した公文書。寛延三（1750）～慶応３（1867）年まで年代別に簿冊の形になっており，富山県立図書館に原本が保管されている。噴火記録（参考資料１）は，立山地獄谷での火山灰噴出の状況を視察した結果を奉行所に提出した注進状の写しで，信憑性は高い。

ｃ）「晶山丙申録」

磐城平藩士鍋田晶山（1801～1872）が天保７年（1836）に書き残した備忘録。噴火に関する記事はｂ）と同一である。天保７年７月とした日付は，天保７年５月の誤記の可能性が高い。

４．まとめ

弥陀ヶ原火山に関して複数の噴火記録が存在する。このうち1836年７月９日に噴火に関する記録については，出典が公的な文書の写しで，火口近傍から観察した噴煙や土砂噴出の様子など具体的な記述が残されており信憑性が高い。科学的考察に耐えうる噴火記録は，この1836年７月９日の活動だけである。

小林（1980）は地獄谷の爆裂火口から放出されたテフラ層を４層確認し，その平均的な噴出間隔を約2500年と見積もった。今回確認された噴火記事は，弥陀ヶ原火山における歴史時代の噴火活動の発生を示す初めてのものであろう。

---

*Received 10 Apr., 1998
**中野　俊・伊藤順一

第１表　弥陀ヶ原火山に関する噴火記録の一覧
Table 1. List of the ancient manuscripts about Midagahara Volcano

年月日 (西暦)	記載の抜粋	古文書名	初出文献
慶雲元年 (704年)	慶雲元年（704年）に立山の西邊に地災ありたる由にて…	“佐伯正範氏の實見録”	大塚(1890)
天保七年五月二十六日 (1836年7月9日)	…地獄谷近邊煙ニテ闇ク相成、音高ク砂石泥等吹揚、近寄事不相叶…	「伊東御触留」	廣瀬(1984)
天保七年七月 (1836年8-9月)	同上	「晶山丙申録」	河井(1889)
天保十年四月二十九日 (1839年6月10日)	御安地獄破裂し鼠色の灰砂を降したりと謂ふ	“佐伯正範氏の實見録”	大塚(1890)

参　考　文　献

廣瀬　誠（1984）：立山黒部奥山の歴史と伝承，桂書房，635p.

河井庫太郎（1889）：日本火山噴火調，東京地学協会報告，11，3-46.

村山　磐（1979）：日本の火山(２)，大明堂，276p.

建設省北陸地方建設局立山砂防工事事務所（1997）：立山砂防70年の歩み.

小林武彦（1980）：立山火山最末期の水蒸気爆発，火山，25，297.

大塚専一（1890）：立山爆裂の記事，地学雑，2，121-124.